

# 「Hot Potatoes」を使った初修ドイツ語 CALL教材について

永井達夫

On CALL teaching materials for the basic German using “Hot Potatoes”

Tatsuo NAGAI

## 1. パソコン・インターネットを使った授業の10年

報告者が最初にドイツ語の授業にインターネットを生かそうと思ったのは1996年のことだった。初級ドイツ語4単位（2科目）を履修した2回生を対象にしたドイツ語Ⅲの講義で、前期で終わってしまったテキストを補充するために、インターネットのホームページに教材を求めた。翌年同じ講義での新たな試みとして、ドイツ語のホームページからのみ教材を選ぶことをシラバスの段階から明らかにした講義を行った<sup>1)</sup>。ドイツ語Ⅲが選択科目であるにもかかわらず、ドイツ語学習の動機付けがしっかりした多くの学生が集まり、それなりの成果を上げることができた。授業の具体的な方法と成果、さらにいくつかの問題点は、それ以降ほぼ2年ごとに行ってきた報告の第1回目<sup>2)</sup>に詳しく書いているので、そちらを参考にさせていただきたいが、授業の「長所と短所」として学生に挙げてもらったアンケートの内容が、今回のこの報告にも役に立つと思われるので再録することにする。なお括弧の中は現時点での説明である。

「長所として：実際に使われているドイツ語を学べる。ドイツ語圏の今の姿が分かる。自分たちの興味のあるテーマで学べる（学生の興味の対象をあらかじめ聞き、可能な限り関連するテキストを探した）。インターネットについて学べる。テキストが毎回変わっていくの

---

平成17年2月28日 原稿受理

大阪産業大学 教養部非常勤講師

1) 龍谷大学（瀬田）社会学部・理工部での授業

2) 永井達夫, [1999], 「中級ドイツ語でのインターネット・ホームページ教材の実例と問題点」, 関西大学『独逸文学』第43号, p. 151-169

で飽きることがない（1回で終えることのできる分量を、その場で出席者に割り振り、辞書を引かせて発表させた）。テーマの選択の幅が広く、さらに途中でどのようなにも修正がきく。授業を何度か休んでもついていける。即時性に優れている。自分たちが思ってもいなかった視点を与えてくれる。ドイツ人の考え方が分かる。日本での新しい情報をドイツ語で知ることができる（日本をテーマにしたドイツ語のテキストをしばしば取り上げた）。短所として：予習することができない。ある程度のドイツ語の実力がないとついていけない（学生が訳しきれない部分は積極的に報告者が補った）。ホームページにスペルミス・文法の間違いがままある。新語・造語など辞書にない単語がある。インターネット特有の表現は説明されないと分からない。インターネットやパソコンの知識が必要である。1クラスの学生数が多い（選択科目は同じ時間の必修科目との関係で履修者の増減が激しい。更に翌年も同じ主旨の講義を行ったが履修者はかなり減った）。せっかくの電子データをわざわざ紙にプリントしている。ドイツ語そのものの実力がつかなかった気がする。各自がパソコンを持つことが必要。教室から直接インターネットにアクセスできない。カラープリンタで出力したものをカラーコピーで配ってほしい<sup>3)</sup>。]

今の時点でふり返ると、学生の感想に当時の、インターネットやパソコンを情報系以外の授業で使うことがまだめづらしかった頃の、懐かしい状況が思いだされて興味深い。感想にはメディアとしてのインターネットの特徴、すなわち「即時性（世界のどこかで起こった出来事が時間差なしに世界中に伝わる）」「平等性（マスメディアによるホームページと個人のホームページが同じ土俵に上がっている）」「検索性（必要とする情報だけを一瞬にして引き出せる）」などから導き出されるものと、学生個人のドイツ語学習への動機付け（の欠如）に起因するものがあり、それらは区別して考えなければならないとしても、アンケートからはインターネット教材を使うことが概して好意的に受け容れられているのが分かった。とはいえ当時はまだかなりの学生にとってインターネットやパソコンが身近なものではなかった。それは1999年の時点でも報告者のクラスの学生の2割しか、自宅または下宿に自分が自由に使えるインターネットに繋がったパソコンを持っていなかったことから分かる<sup>4)</sup>。

最初の転機は2000年に訪れた。いわゆるCALL教室を利用して初めて通年のドイツ語の授業をすることになった<sup>5)</sup>。CALL教室とは、各学生がインターネットに繋がったパソコンを1台ずつ使用でき、なんらかの形でそれらのパソコンを教師の側でコントロールできる設

---

3) 永井達夫, [1999], p. 161-162

4) 次の文献での指摘。永井達夫, [2000], 「LL教室にて思うこと」, 『関西大学視聴覚教育』第28号, p. 90-92

5) 関西大学文学部ドイツ文学科での授業

備が整った教室ととりあえず定義しておこう。報告者はそれまでの、自分のパソコンからプリントアウトしたものをテキストとして使っていたやり方から、飛躍的に多くのことをドイツ語の授業の中に盛り込むことができるようになった。対象の学生がドイツ語・ドイツ文学専攻の2回生以上だったことも幸運だった。確かに設備は古く、ネットの回線もしばしば使えなくなっていた。またパソコンの使い方が分からない学生の質問で何度も授業が中断した。けれども、学生は報告者が与える課題（例えばドイツ語圏の動物園のホームページを調べてパンフレットを作らせる。ドイツ料理のレシピを作らせる。ギムナジウムのホームページからドイツの若者意識を探る。ドイツにおける日本への関心を調べる。等々）をこなす過程で、ドイツ語のテキストからすばやく自分の必要とする情報を読み取る術を身につけていった。特にドイツ語検索サイトの使い方を丁寧に教えたことはドイツ語専修の学生には役に立ったはずだ<sup>6)</sup>。

やがて報告者はインターネットのもう1つの重要な特徴、「双方向性（受けとるだけでなく情報の発信者にもなれる）」に着目して、4年続いたこの講義の中でさらにいくつかのことを試みた。まず学生が提出するレポートをワードのファイルにさせたのを敷衍して、そのままインターネット上に公開できる形式であるHTMLファイルを作らせ、実際に報告者のホームページ<sup>7)</sup>で発表した。自由なテーマでリンク集（あるテーマに従ったホームページのカタログ）を作らせたところ、2001年度の学生は次のようなタイトルのリンク集を作った。「ドイツのKuchen」「Märchenを読もう～グリム兄弟編」「ドイツのパン屋さん」「日本車が走る」「KINO IN DEUTSCHLAND」「Deutsche Zeitschriften」「ドイツ車社会」「ドイツ人カメラマンの作品や写真集」「Bundesliga」「ドイツの新聞」「ドイツの食～ワイン特集」「Kaiserin Elisabeth - 美貌の皇妃エリザベート」「Blume好きな人あつまれ」などである。これらの「作品」はネット上に公開され、学生それぞれが他の学生の「作品」を熟読、批判することができるようにした。

また次の年からはドイツのホームページのウェブマスターに手紙を書かせる試みも始めた<sup>8)</sup>。これらのことが可能になったのは、教室の整備が進み（4年でパソコンのOSは2回変わった）機材がストレスなく使えるようになったのと、学生のコンピュータリテラシーの

---

6) 次の文献で教授法的な分析を報告者は試みている。永井達夫, [2000], 「ドイツ語の授業とインターネット—その現状と可能性—」, 『京都ドイツ語学研究会会報』第14号, p. 43-56

7) 「ドイツ語コム」<http://www.doitsugo.com> (28. 2. 2005) 以降「報告者のホームページ」との言及があれば、すべてこの「ドイツ語コム」を指す

8) 「双方向性」に関しての経過は次の報告を参照のこと。永井達夫, [2002], 「学生のコンピュータリテラシー向上にともなう外国語授業の新たな展開—中級ドイツ語のインタラクティブな授業を例に—」, 『関西大学外国語研究フォーラム』創刊号, p. 65-83

平均値が向上したことによる。コンピュータに詳しい学生は昔からいたのだが、小中学校でのコンピュータ教育の成果が実を結び、いまでは学生の誰もが一定のレベルでパソコンを使うことができるようになってきている。そうした中で手をつけずにいたのが、ドイツ語を初めて学ぶ学生のためにどのようにパソコンやインターネットを使うかの問題だった。それまでも報告者は既成のソフトウェアを試したことがあった。どれもマルチメディア（テキストだけでなく映像や音響の効果を積極的に利用する方法）に重点を置いたもので、例えばマイクに向かいドイツ語を話すとそのイントネーションが図形化されたり、会話の場面で実際のドイツ人の話す映像が現れたりなど、その場では目新しく学生の興味も引くのだが、1年を通じた授業で使うには内容が薄く、また同じ大学で教える他のドイツ語の授業との整合性も取れない。さらに学生の数だけソフトウェア（もしくはそのライセンス）を購入しなければならず、成果に対する費用がかかりすぎる。それでも出講している各大学からは新設したCALL教室を積極的に使えないだろうかと要請され続けた。それならばと報告者の講義のほとんどを占めている初修ドイツ語の授業のために、新たなコンピュータ及びインターネットの利用法を考えることにした。

「Hot Potatoes」という、パソコン用の教材を作るための秀逸なソフトウェアに出会ったことも契機だった。「Hot Potatoes」はカナダのヴィクトリア大学で開発された教材作成ソフトで、最大の特徴は作られた練習問題がインターネット上に公開できるhtmlファイルになることだ。まさにCALL教材とインターネットを繋ぐもので、教育者には無料で開放されている<sup>9)</sup>。ネット上に教材を置けば、学生はCALL教室からインターネット経由でそれを利用できる。自宅または情報処理室のパソコンから予習復習ができる。教師は一度作った練習問題の改訂にいつでも好きなだけ取り組める。報告者は実際に2002年度の1年をかけて、大学での授業の進度に合わせ初修ドイツ語用の練習問題を「Hot Potatoes」で作り、自分のホームページに載せていった。さらに2003/2004年度とそれぞれ10を越えるクラスでこの教材を使った授業を行った<sup>10)</sup>。

本報告では、実際に報告者が授業で使用している教材を例に挙げ、「Hot Potatoes」で作った初修ドイツ語CALL教材の現状と問題点を探っていきたい。またそのことでこれから作られるべき理想的なCALL教材の姿も描いてみたい。

---

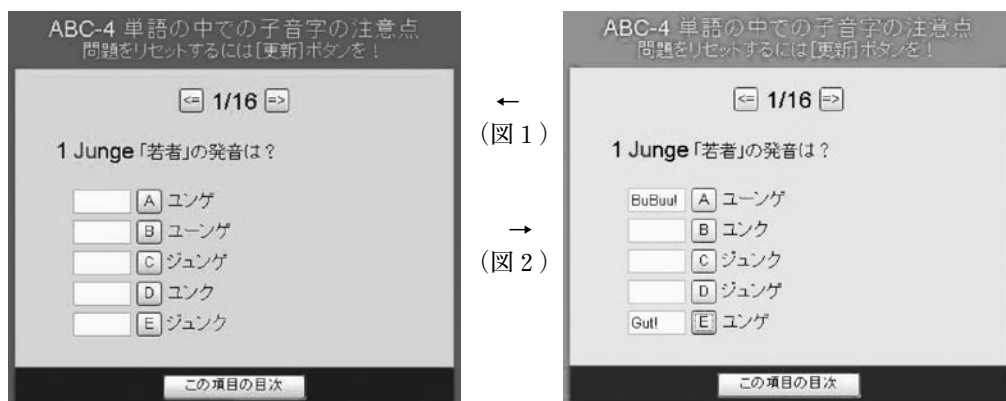
9) “Hot Potatoes Home Page” <http://web.uvic.ca/hrd/halfbaked/> (28. 2. 2005) からダウンロードができる。「Hot Potatoes ガイド」<http://skomatsu.free.fr/HotPotguide/> (28. 2. 2005) は日本語でのガイド。ドイツ語で使い方を解説しているホームページとしては“Hot Potatoes - Deutsche Adaption” <http://www.hotpotatoes.de/> (28. 2. 2005)

10) 2003年までの過渡期的経過報告として次の報告を参照のこと。永井達夫, [2003], 近畿大学『視聴覚教育』第3号(通算25号), p. 45-51

## 2. 「Hot Potatoes」で何ができるのか

日本の教育関係者でも「Hot Potatoes」に早くから注目し、その使い方や実際に作った練習問題などをネット上に公開している方が少なくない<sup>11)</sup>。また「Hot Potatoes」は昨年最新のバージョン6に変わっており、それまでのものよりかなり使いやすくなった。特に練習問題や解説に日本語を使う場合の手間が格段に省かれた。報告者が利用した時はまだ前のバージョンだったため、日本語を打ち込むのに大変な苦勞をした。さて「Hot Potatoes」の使い方に関する具体的な説明は、注に載せたホームページを参考にさせていただくとして、ここではどのようなドイツ語の練習問題が作れるのかを具体的に紹介していきたい。「Hot Potatoes」では練習問題の形式をいくつかのタイプに分け、それぞれが異なった作成画面から作業をするようになっている。以下パソコンからの画像はその作成画面ではなく、練習問題として完成し実際に報告者のホームページに載っているものである。報告者が主に使った4つの練習問題タイプに従って見ていく<sup>12)</sup>。

・「Hot Potatoes」で作る「選択問題（JBC）<sup>13)</sup>」の一例



これは発音の項目の「ローマ字式に読めない一文字子音」の練習問題である。(図1)は正解を選ぶ前の状態で、赤字の「Ju」の読み方を問題としている。この練習問題に至るまでにすでに学んでいる母音の長短の知識もここでは必要とされる。(図2)のように正解を選

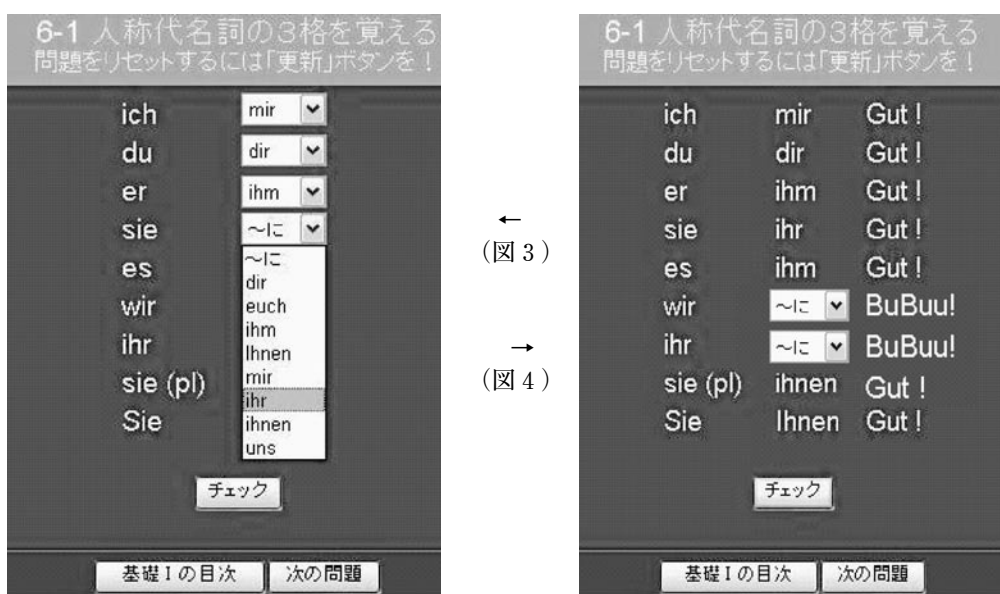
11) フランス語の小松祐子氏の「Chez nous」<http://skomatsu.free.fr/japonais.htm> (28.2.2005) を素晴らしい一例として挙げておく

12) さらに2つの問題作成形式がある。詳しくは上記の「Hot Potatoes」ホームページを参照

13) ( ) の中の記号は、「Hot Potatoes」での作成画面を表す

ぶと「Gut!」と表示され、その前に不正解のボタンをマウスでクリックしていると「BuBuu!」と出る。これらの言葉は好きな表現に変えることができる。選択肢の数も自由に増やせる。「1/16」とあるのは、同じような練習問題が16問あることを示している。矢印をクリックすることで次の練習問題に進んだり、また前に戻ったりすることができる。さてここで（図1）と（図2）にはでは選択肢の順序が違っているのにお気づきだろうか。パソコンの「更新」ボタン<sup>14</sup>を押すことで何度でも同じ練習問題を行うことができるが、その都度選択肢の順番が変わる。このような仕掛はパソコンによる練習問題の得意とするところだろう。

・「Hot Potatos」で作るマッチング問題（JMatch）



「選択問題」がただ1つの正解を選択肢の中から選ぶ練習問題なら、この「マッチング問題」は、いくつかの語句からなる2つのグループ間で正しい組み合わせを見つけるものだ。「人称代名詞の3格の変化形」を選ばせるこの練習問題では、すべての「人称代名詞の1格」が1つのグループに、組み合わせを選ばせるもう片方のグループに「3格の変化形」が属する。（図3）では ich, du, er の所まで解答し、いま sie に取りかかっている。すべての組み合わせを選び終え、下にある「チェック」をクリックしたのが、（図4）であるが、ここでは wir と ihr の所が不正解になっている。この「マッチング問題」では、先に並んだグループ（こ

14) 正しくはホームページを見るためのソフトであるブラウザの「更新」ボタンのこと

ここでは1格の形)の順序が固定されるのが難点だ。組み合わせ方(ここでは3格の形)は、問題を繰り返すたびに順番が変わる。

・「Hot Potatos」で作る「並び換え問題(JMixe)」の一例



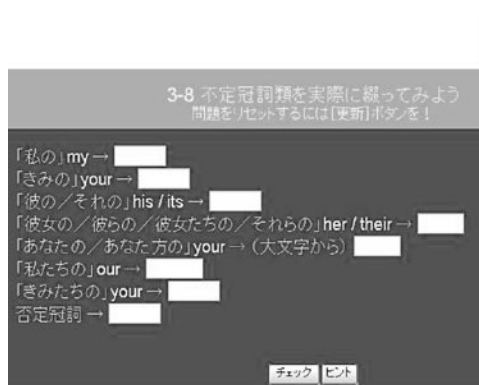
(図5)



(図6)

「並び換え問題」もパソコンによる練習問題らしい特徴を持っている。正しい語順に単語をクリックしていくと、それによって単語が並べられていく。(図5)は「現在完了形の独作文」の例だが、Er, hat, gesternと選んだところが(図6)になる。「チェック」をクリックし、もし不正解なら、合っている所までの単語が残される。答えを求める前に1単語ごとのやり直しもできる。この練習問題は「話法の助動詞」や「従属接続詞」など語順が問題となる場合に利用価値がある。

・「Hot Potatos」で作る「穴埋め問題(JCloze)」の一例



(図7)



(図8)

次は単純な「穴埋め問題」だ。学生は実際にキーボードから文字を入れることになる。

(図7)は「不定冠詞類の綴り」を求める練習問題の、解答を始める前の状態で、(図8)では「チェック」をクリックし、「きみたちの」の所だけが間違いであることを示している。さてここでは図の上の箇所注目してもらいたい。成績がパーセンテージで出ている。実は前の2つの練習問題も含めてすべての練習問題で正答率が表示される。また「チェック」の横にある「ヒント」を使うと、任意の場所で1文字ずつ正解を出してくれる。この練習問題では単語の綴りを問うているが、1センテンスすべてを書かせる問題を作ることも可能だ。

### 3. 1つの単元をCALL教材を使ってどう教えるのか

「Hot Potatoes」を使うとどのような練習問題を作ることができるのかが分かったところで、次はそのままにして作られた練習問題が実際のドイツ語の授業の中でどう使われるのかを見ていきたい。報告者のホームページでは練習問題の目次として次のようなインデックスを載せている。(→)をクリックすると各練習問題が開くようになっている。

#### ● § 1. 動詞の人称変化にチャレンジ!

- ・・・ 1 - 1 人称代名詞を覚えよう (→)
- ・・・ 1 - 2 実際に綴れるかな? (→)
- ・・・ 1 - 3 不定詞から語幹を取り出そう (→)
- ・・・ 1 - 4 動詞の現在形で使う人称語尾を覚えよう (→)
- ・・・ 1 - 5 基本的な人称変化をきみの脳にたたき込もう (→)
- ・・・ 1 - 6 3大動詞の人称変化形 > sein (→) haben (→) werden (→)
- ・・・ 1 - 7 実際に綴れるかな? (→)

#### ● § 2. 動詞の人称変化の展開/命令形

- ・・・ 2 - 1 「語尾要注意動詞」(arbeiten 型/reisen 型動詞) (→)
- ・・・ 2 - 2 変わる語尾の確認 (arbeiten 型の場合) (→)
- ・・・ 2 - 3 変わる語尾の確認 (reisen 型の場合) (→)
- ・・・ 2 - 4 母音変化のある不規則動詞 (fahren 型の場合) (→)
- ・・・ 2 - 5 母音変化のある不規則動詞 (sprechen 型の場合) (→)
- ・・・ 2 - 6 母音変化のある不規則動詞 (sehen 型の場合) (→)
- ・・・ 2 - 7 不規則な動詞の人称変化を実際に試してみよう (→)
- ・・・ 2 - 8 動詞の現在人称変化, 連続25問/制限時間2分! (→)
- ・・・ 2 - 9 命令形, du に対する場合 (→)
- ・・・ 2 - 10 命令形, ihr と Sie に対する場合 (→)



● § 3. 〈名詞の性〉と〈冠詞／冠詞類〉

・・・ 3 - 1 名詞の性と定冠詞 der (→)

・・・ 3 - 2 英語の this は定冠詞の仲間 (→) (以下 § 17章までである)

この表からお分かりのように、練習問題はドイツ語の授業で一般に使われている文法事項に沿っている。すでに書いたことだが、他のクラスで行われている授業との整合性が必要だからだ。最近と同じクラスを2人の教師で受け持つ「ペア授業」もめずらしくなくなった。また未だにほとんどの大学では教科書として冊子のドイツ語テキストを使わなければならない。そのような場合、CALL 授業のみが独自の進捗で授業を行うわけにいかない。

それではドイツ語を学ぶ学生が最初にぶつかる壁にもなりえる「動詞の現在人称変化」を教える、ある日の授業をシミュレーションしてみよう。

・「人称代名詞を覚えよう」(図9)

動詞の人称変化の前提としてドイツ語の人称代名詞を覚える。一般的な授業ではそれぞれの人称代名詞を紹介した後、2, 3度声に出してから次に進むのだろうが、この教材でもそこまでは同じだ。テキストに書いてあったり黒板に書いたりする内容が練習問題の右側に「基本を覚えよう」として載せてある(図9の右)。報告者はそれを声に出して読み、学生にも人称代名詞の復唱をさせる。その上で練習問題を何度もやらせる。ここでは学習した内容を確認するために練習問題があるのではなく、覚えるための手助けとして練習問題があるのだ。先に見たように「マッチング問題」では、組み合わせの元になる項目(ここではドイツ

語の人称代名詞)の順番を変えることができない。そこで報告者は「それでは次は下からやってください」「次はぼくが言うやつからやってください。まずは ihr」というように工夫をしている。

この「基本を覚えよう」の部分をそのままプリントアウトして学生に配るようになっている。とくに教科書を使わなくてよいクラスの場合はそうしたフォローが必要だ。学生は紙で書かれたものがないと、特に定期テストが近づくと、また、不安になるようだ。報告者は学生全員に入学時にノートパソコンを購入させる大学<sup>15)</sup>にも出講しているが、そこでは履修している学生のすべてのパソコンのハードディスクに練習問題をインストールすることになっている。インターネットに繋がなくてもノートパソコンを開けば練習問題を解くことができる。またプリントアウトした解説を配る必要もない。

・「実際に綴れるかな？」 (図10)

一通り覚えた所でそれが実際に綴れるかどうかを「穴埋め問題」で試してみる。ここでも記憶の確認よりも、この練習問題を繰り返すことで綴りを覚えることに眼目が置かれる。授業では、一定の時間を与えて覚えさせたあとに、その場でテストをすることもある。ひとりひとりの正解率を言わせれば小テストの代わりにもなる。また一齐に練習問題を始め、全部正解することができた順番に手を挙げさせるのも学生にとってよい刺激になる。ただしキーボードを打つ速度は人によりかなりの差があるので、そのための配慮は必要だ。

15) 神戸学院大学ではそのためのインフラも整備されていて、多くの教室や休憩場所に学内 LANにつながる情報コンセントが設けられている。

・「不定詞から語幹を取り出そう」（図11）

次の不定詞を「語幹」と「不定詞の語尾」に分解  
してみよう

問題包/セッとするには「更新」ボタンを！

1) singen -->  +

2) lernen -->  +

3) sagen -->  +

4) machen -->  +

5) wohnen -->  +

6) spielen -->  +

7) kaufen -->  +

基本を覚えよう

動詞のもとの形を「不定詞」といいます。辞書の中ではこの不定詞が見出し語に使われます。

実際の文中では「不定詞」がそのまま出てくることもあります。多くの場合は主語に合わせて語尾変化したものが使われます。この語尾が定まった形を「動詞／定形」といいます。

「動詞」を作るためには、まず不定詞から共通の語尾「-en」を取る必要があります。-enを取った残りの部分を「語幹」といいます。

「不定詞」＝「語幹」＋「en」となります。

なおあとで取り上げますが、不定詞の語尾 -en が、語幹の発音の都合によって、-n (e が抜ける) ことがあります。

---

ここでは語幹を作る練習をしましょう。慣れてしまうと、不定詞を見ると、すぐ語幹が浮かび上がります。

この「穴埋め問題」は、学生が苦手とする「不定詞と語幹の関係」を徹底的に覚えさせるためのものだ。「不定詞から en を取ってから人称語尾をつける」と言葉で説明するのはたやすいが、少なからぬ学生が ich singene や er singet のようなミスをしてしまう。この練習問題はただキーボードを打つだけでできてしまう単純なものなので、とりわけなぜこの項目をしっかりと覚えなければいけないのかを学生に説明する必要がある。

・「動詞の現在形で使う人称語尾を覚えよう」（図12）

1-4 動詞の現在形で使う人称語尾を覚えよう

問題包/セッとするには「更新」ボタンを！

ich	<input type="text" value="-e"/>
du	<input type="text" value="-st"/>
er, sie, es	<input type="text" value="-t"/>
wir	<input type="text" value="-en"/>
ihr	<input type="text" value="-t"/>
sie (Sie, Sie)	<input type="text" value="語尾は？"/>

チェック

基礎1の目次    次の問題

基本を覚えよう

「語幹」に続く語尾は、それぞれの主語によって変わります。この変化を「主語の人称に合わせて語尾の変化」といいます。

主語が：

**ich**(1人称単数)なら **-e**

**du**(2人称単数)なら **-st**

**er/sie/es**(3人称単数) **-t**

**wir**(1人称複数)なら **-en**

**ihr**(2人称複数)なら **-t**

**sie**(3人称複数)なら **-en**

wir と3人称複数の sie(これと文法的に同じ扱いの Sie も)は、いつも同じ語尾になることを覚えておく、記憶する手間が省けます。

なおこの語尾を縦に est, ten, ten「エストテンテン」と読んで覚えるやり方が音から？ 伝わっています。

---

ここでは、ここを読まないでもできるように、何度も繰り返して問題をやってください。

「エ・スト・テン・テン」は多くの先生方が、その言い方で覚えさせているだろう。ここでは「マッチング問題」になっているが、「エ・スト・テン・テン」を何度か復唱したあと、すぐに確認テストとして使ってもよいだろう。確認テストの時は、画面上のウィンドウを移動させて、右側の「基本を覚えよう」の部分を確認することができる。

・「基本的な人称変化をきみの脳にたたき込もう」 (図13)

1-5 与えられた動詞を人称変化させよ  
問題をリセットするには[更新]ボタンを!

例: lernen「学ぶ」  
ich lerne, du lernst, er/sie/es lernt, wir lernen, ihr lernet, sie/Sie/Sie lernen

1. trinken「飲む」  
ich trinke, du trinkst, er/sie/es trinkt, wir trinken, ihr trinkt, sie/Sie/Sie trinken

2. sagen「言う」  
ich sage, du sagst, er/sie/es, wir, ihr, sie/Sie/Sie

いよいよ授業の目的地に辿り着いた。ここまで来るとほとんどの学生が苦もなくこの「穴埋め問題」を解いていく。(図13)は実際は10番まで問題が続いている。不規則動詞以外はどんな動詞でも同じようにして現在人称変化をさせればよいことが理解できる。通常、途中の休憩時間(と言ってもたいていの場合はランデスクンデためのビデオを見るが)を入れてここまでで90分の授業時間を使い果たすことになる。

#### 4. 理想的な CALL 教材のために

そのときは完璧に問題を解いていた学生が次の週になるとやったことをすっかり忘れていることがある。または、やる気もあり良くできる印象があったのに、定期試験の結果が極端に悪い。彼らは記憶を定着させるやり方が下手なのだろう。報告者の授業では、授業の始まりの15分ほどを前の週に覚えたことの復習に当てている。ほとんどの学生は自宅でドイツ語の復習をすることがないため15分の時間では足りず、授業時間の半分が復習になってしまうこともある。重点項目の場合はそれでも良いと思っているが、1つの解決法として考えられるのは、単元ごとに15分ほどで全体を振り返ることのできる練習問題を新たに作ることだ。「Hot Potatoes」がバージョン6になって、それまでと違い複数の問題形式が混在した練習問題を作れるようになったので、そうした用途に合うものが比較的簡単に作れるかもしれない。

練習問題に取り上げている項目の見直しも必要かもしれない。他のドイツ語の授業との整合性にこだわるあまり、あまりに旧来の文法項目に引きずられてはいないか。報告者は大学の授業のためにだけホームページを立ち上げたのではなかった。広くドイツ語を学ぶ人々に便宜を図る目的があった。いろいろな角度からドイツ語を学んでもらおうと思い、その1つとしてあえて旧来の文法事項に沿ったコーナーを作ってみたのだ。それが授業との兼ね合いで報告者のホームページのもっとも分量の多いコーナーとなった。CALL 授業の教材としては、文法を理解するのと違うアプローチからドイツ語を学ぶことを考えても当然よいわけだ。

例えばインターネットの「マルチメディア性」や「双方向性」にもっと目を向けてもよいだろう。練習問題に音声貼り付けるのは報告者の長年の構想なのだが、音声のモデルとなるべきドイツ人の確保等、いくつもの理由で実現できていない。「Hot Potatoes」自体はテキストをベースとした教材作成ソフトウェアである。手軽ではあるがマルチメディアを志向する教材を作るには別のソフトウェアも必要になるだろう。ただ先にも述べたようにマルチメディアによる語学教材には参考となるような良いものがないのが実情だ。「双方向性」に関しては、学生がパソコンで小テストをしたとき、その結果がそのまま報告者のもとにメールなどで届くシステムを導入したいと考えている。今年度は多くのクラスで小テストを実施したが、その集計などの手間で大変な思いをした。その時間と労力はさらに良い練習問題を作る方に回したい。さらに集計した結果を学生がインターネット上で閲覧できればきっと彼らの励みになるだろう。

かつてパソコンが普及するとオフィスから紙がなくなると言われていたが、実際は前よりも紙の消費量が増えた。CALL 教室でも同じことが起こっている。報告者は最近、パソコンを使った授業でもやはり冊子のテキストが必要なのだと思うようになった。ただし従来のテキストではなく CALL 授業用に特化されたものでなければならない。そのプロトタイプを今年には作ってみたい。

また報告者はビデオや DVD によるランデスクンデ用の教材にも大いに興味を持ちさまざまな取り組みをしている。それらはまた別の機会に詳述するとして、そうした他の授業方法とのコンビネーションが CALL 教室での授業にも求められる。90分の授業時間を、シナリオを書くような準備をして演出することが今では望まれているのかもしれない。それらの総合的な授業の見直しの中で初めて理想的な CALL 教材の姿も見えてくるのだろう。